

基幹教育院の活動紹介 (2015 年度)

新聞・TVでの報道

西日本新聞朝刊「この街を母校に 福岡で学ぼう！九州大学編：学び続ける幹を育成」(2015/8/8)

他大学等からの訪問記録

富士通株式会社 音声認識デモ・特別支援アプリについての情報交換 (2015/4/24)
株式会社サポートケイ 障害学生の就労に関する情報交換 (2015/4/27)
チャレンジド・アソシエーション 就労支援プログラムについて (2015/4/28)
室田真男氏 (東京工業大学 大学院社会理工学研究所 教授)・渡辺雄貴氏 (東京工業大学 教育革新センター准教授)・森田英夫氏 (東京工業大学 学務部教務課 専門職) 「課題協学」授業視察 (2015/5/8)
株式会社サポートケイ (就労支援における連携) 情報交換 (2015/5/28)
今野文子氏 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 講師)・足立佳菜氏 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 助手) 「課題協学」授業視察 (2015/5/29)、「大学院基幹教育」授業視察 (2015/5/30)
富士通株式会社 ピア・サポーター学生育成、支援機器、全学支援体制に関する情報交換 (2015/6/26、7/24、8/7、9/8、10/23)
浙江大学 本科生院副院長 他4名 (2015/7/7)
株式会社ミライロ 情報交換 (2015/7/8)
西原明法氏 (東京工業大学 大学院社会理工学研究所 教授)・室田真男氏 (東京工業大学 大学院社会理工学研究所 教授)・渡辺雄貴氏 (東京工業大学 教育革新センター 准教授)・森田英夫氏 (東京工業大学 学務部教務課 専門職) 「基幹教育セミナー」授業視察 (2015/7/24)
株式会社スカイフィッシュ 支援機器に関する情報交換 (2015/9/8)
世田谷福祉専門学校 手話通訳学科長 学術手話通訳についての情報交換 (2015/9/16)
萩原直幸氏 (岡山大学 文学部 准教授) アクティブ・ラーニングに関するインタビュー (田中岳准教授、2015/9/18)
NPO法人 障がい者相互支援センターMCP、障害者支援に関する情報交換 (2015/10/29)
遠山和夫氏 (岡山大学 教育開発センター 助教)・吉田昌彦氏 (岡山大学 学務部学務企画課 課員) アクティブ・ラーニングに関するインタビュー (田中岳准教授、2015/11/4)
新日鐵住金八幡製作所 副所長 他1名 (2015/11/6)
九州・沖縄地区国立大学障害学生支援協議会参加大学 (2015/12/1)
釜山大学 教養教育院長 他4名 (2015/12/7)
大阪大学 全学教育推進機構教授2名 他2名 (2015/12/14)
岡山大学 障害学生支援室 (2015/12/21)
橋本健夫氏 (関西国際大学 副学長) アクティブ・ラーニングに関するインタビュー (田中岳准教授、2016/1/7)
大分大学 副学長、新学部設置準備室より9名、面接・小論文の公平性についての調査 (木村拓也准教授、2016/1/18)

各教員の受賞、新聞・TV報道等

Thieme Chemistry Journal Award (Thieme Chemistry) (内田竜也准教授、2015/1/22)
プレスリリース「過去の感情を未来の動作で書き換える」一上下に画面をスワイプすることで感情を修正できることが明らかに！ (山田祐樹准教授 他、2015/3/25)
日本認知心理学会第12回大会優秀発表賞受賞 (山田祐樹准教授・佐々木恭志郎・三浦佳世、2015/7/5)
International Conference on Advanced Learning Technologies 2015, Best Paper Award for Short Paper (山田政寛准教授、2015/7)
The 12th Cognition and Exploratory Learning in Digital Age 2015, Best Paper Award (山田政寛准教授、2015/10)
九州心理学会第75回大会優秀発表賞受賞 (山田祐樹准教授・佐々木恭志郎、2015/11/14)
有機合成化学協会九州山口支部 奨励賞 (内田竜也准教授、2015/11/26)
Banyu Chemist Award (BCA)賞 (万有生命科学振興国際財団) (内田竜也准教授、2015/12/5)
日本テスト学会発表賞受賞 (木村拓也准教授、2015/12/20)

編集後記

今冬は雪が降る日も多い伊都キャンパスでしたが、無事に基幹教育の2年目が終わろうとしています。私は初年次向けの授業しか担当していないこともあり、今年1年を通して授業などでかかわってきた学生たちがセンターゾーンからそれぞれの場所へ向かっていくのは、喜ばしい反面、少し寂しい気持ちもあります。入学したてのときの高校生の顔から大学生の顔に変わっていった学生たちが、来年度以降、更に学びを深めていってくれることに期待しつつ、来年度の新入生の活気と春の陽気を楽しみに待っていたと思います。さて、ニューズレターも第4号の発行を迎えました。本号では院長挨拶をはじめに、学修・健康支援部門から福盛英明先生の教員紹介、さらに「自然科学総合実験」と「言語文化基礎科目」の授業紹介、そして2015年度の基幹教育院の活動報告をお届けすることができました。今後も、教員紹介や授業紹介をはじめとした、基幹教育院に関する様々な情報や取り組みを発信していく予定です。最後に、ご多忙にもかかわらず突然のお願いに快く寄稿して下さった先生方に、編集委員一同厚く御礼申し上げます。(FO)

基幹教育院 ニューズレター

第4号

Winter 2016

巻頭言
教員紹介
授業紹介
(自然科学総合実験、言語文化基礎科目)
基幹教育院の活動紹介

発行 九州大学基幹教育院
〒819-0395 福岡市西区元岡 744
http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/
版面デザイン・編集
岡本 剛

巻頭言

基幹教育院長 丸野 俊一



価値観の多様化、科学技術や道具の開発、未踏な問題状況など、急激に変化するグローバル社会の中では、特定の狭い文脈や状況の中で役立つ細切れの知識や技能は役立ちません。いまや「知や技能の賞味期限」は非常に短いのです。時代や状況を超えて役立つもの、それは「主体的に問題を設定し、幅広い視点から多様な知や技能を関連付け、新たな問題発見・解決に立ち向かう柔軟なものの見方・考え方」であり、それらを駆動させる「逞しいチャレンジ精神と行動力」です。

そうした人材を育成するには、基礎教育から専門教育さらには大学院教育に至るまで、自律的に学び続けるための「基幹」(考え方・学び方を学ぶ心の習慣・態度)の涵養に軸足を置いた新たなカリキュラムを開発し、「豊かな教養に支えられた広い・深い専門性を持ったアクティブ・ラーナー」の養成が不可欠です。この理念に依拠した基幹教育が、九州大学では平成26年4月からスタートしました。その実施責任母体となる組織が、基幹教育院です。基幹教育院に所属する教員には、次のような重要なミッションがあります。一つ目は、全学出動体制の基に、一年次の基幹教育カリキュラムをマネージし、実施にあたり中心的役割を果たすこと、高年次基幹教育、大学院基幹教育をも構想し、実施においても中心的役割を果たすこと。二つ目は、「基幹」を育むカリキュラムの開発や教授法の開発・改善を図り、全学に展開・定着させること。三つ目は、教育と研究に注ぐエフォートは7対3の割合を目安にしつつも、自分の専門領域に関する学府の大学院教育にも携わり、最先端の研究・教育を展開すること。各自には、このように教育・研究・管理運営の三側面において、高度の優れた技能が求められているだけに、責務は重大です。

基幹教育がスタートして2年目が経過し、3年目に突入しようとしています。29年度には、3年間の経験を踏まえたPDCA(plan-do-check-act)サイクルの基に、カリキュラムの改善を図る予定です。そのためには、アクティブ・ラーナーとしての姿勢や態度が、学生一人ひとりに何処まで育っているかを追跡調査し分析・評価すること、また、全学出動体制の意義の重要性及び質の高い安定的教育を実施するルールを見直し・確認すること、さらには教員一人ひとりの教授手法にどのような工夫・改善が見られるかを分析・評価することなどが必要であり、当面の重要な検討課題となっています。

その一方で、九州大学は、現在、教育の国際化に向けて、29年度からクォーター制の導入、英語による教育カリキュラムの開発・充実、30年4月からスタート予定の新学部設置等、極めて重要かつ困難な課題に取り組んでいます。これら全ての課題解決に取り組むためには、総長の強靱なリーダーシップの基に、教職員一人ひとりが、国際社会をリードする基幹総合大学としての九州大学が果たすべき使命をしっかりと認識し、部局の枠を超えた新たな視点

からの意識改革が不可欠です。しかし、長年の経験の中で創り上げ慣れ親しんでいる「学事暦」や「教え方の技法」等、いわゆる既成の枠組みを改めて問い直し、解体して、新たなものを創出していくことは、「言うは易し、行は難し」で困難を極めているのが現状です。

「学生が留学しやすい状況作り、教員の研究時間の確保、諸外国の大学・研究者との交流を踏まえた教育の質の向上」等を図るために導入されるクォーター制や英語による教育カリキュラムの開発・充実への対応は、基幹教育院のみでなく、各部署が責任をもって対処すべき課題です。しかし、各部署の教員の多くは、「まずは基幹教育院でモデルを示して欲しい」という意識を持っているようです。キャンパス移転が進行形の状態であるだけに、時空間の制約から考えると、そうした各部署の意向も理解できなくはありません。

しかし、「将来のあるべき姿を構想していくためには何が本質的か」といった研ぎ澄まされた時代精神と判断力が問われていることを、各学部の教員一人ひとりが強く認識し、「未来社会を生きる学生自身に自分を置き直し重ね合わせて、自分のこととして真摯に受け止め」て、改善に取り組むべきではないでしょうか。各教員は、「動きたくない、動こうとしない、動けない」といった凝り固まった身体や思考を解きほぐし、「学び直し、学びほぐし」という未来に向かう変化のプロセス」として、いま問われている「改善の場」を前向きに考えて欲しいと、私は各部署の教員一人ひとりに期待したいのです。

とりわけ、基幹教育院は、全学の教育システムに関する雛型モデルを創る試金石になっているだけに、いつも、ストレスフルな状況に置かれています。他部署との関わりの世界を通し、各教員の内なる世界は、「混乱、対立、葛藤、戸惑い、躊躇、不安」など、様々な心理的・認知的揺らぎに晒されることが多いと言えます。しかし、基幹教育院の教員は挫けない。そうした揺らぎの中にこそ「前進的な可能性が隠されている」と前向きに受け止め、常に、「学び続ける組織体」として基幹教育院は活動していきたいと決意しています。

福盛 英明

(ふくもり ひであき)

基幹教育院
学修・健康支援部門 准教授



私は、キャンパスライフ・健康支援センター学生相談室カウンセラー（臨床心理士・大学カウンセラー）を兼任しております。臨床心理士になり約20年が過ぎました。普段は、学生さんとの個別面談、学生のごことでお困りの教職員や保護者の方へのコンサルテーションをしています。また、不登校学生、ひきこもり学生、心理的なテーマで修学困難な学生、人間関係に悩む学生への大学内の来談学生グループ活動（居場所グループ活動）、来談学生の親の会を担当しています。

学生相談というフィールドにいる私は、普段、先生方からは見えない学生さんの姿（いわゆる影の部分）と接しているのではないかと思います。一見キラキラ元気そうにしている学生さんが、「実は・・・」と家族の悩みを打ち明けてくれたり、「人に言えないようなコンプレックスをもっているんです」などといった、苦しくつらい思いや気持ちをこわごわ打ち明けてくれたりします。カウンセラーは、それをどうこうしてあげることはできません。でも、少しでもほっとできたり、気持ちを自分で受け入れることができたり、明日からやっぴいこうかな、と思えたりしたらいいなあ、と思いつつ、じっくり学生の話の聴いています。というわけで、カウンセラーというのは、すごい効果をあげたりするものではなく地味な役割ですが、力が十分発揮出来ていない一人ひとりの学生の悩みや心の内側や人生に寄り添い、丁寧に触れていき、少しでも輝きを取り戻し、修学意欲が回復する事を助ける仕事だと思っています。また、大学の中に居場所のない学生さんが、学内の居場所グループ活動で症状と闘いながら少しずつ元気になったり、輝きを見せてくれたりしますと、ああ、この活動やってよかったなあと思えます。困難を持っている学生も、それぞれの発達課題の中で学び、成長している。1人の個人として目の前にいる学生さんの成長に注目する。こういう視点は、教育の中での「アクティブ・ラーナー」育成について考える際に、「厚み」を作るのではないかなあ、と考えています。

自然科学総合実験

専門チーム長 小早川 義尚
(基幹教育院 自然科学実験系部門 教授)



人間は、自然現象の中に様々な法則を見いだしてきました。その営みである自然科学の進展には合理的な実証という過程が必然的に要求されてきました。一方で、自然現象には様々な階層での事象があり、対象とする具体的な事象ごとにそれを解明するための方法・技術も異なっています。また、人間はその解明した自然の法則を利用した創造的営みによって自らの生活を改善してきました。しかし、具体的な技術開発とその利用において近視眼的で総合的・俯瞰的視点の不足による多くの負の側面、公害・資源エネルギー・環境問題なども生み出してしまいました。

そうした中、大学の理系学部での修学を目指す多くの学生も大学受験で選択した特定の科目に限られた学習しかしてきていないという状況があります。そこで、九州大学では、これからの自然科学の進展を担うべき理系学生は、高校では学ばなかった科目を積極的に履修するとともに、様々な階層の自然現象に直に触れて観察・実験を体験する必要があるとの考えに基づき、全理系学生に基幹教育・自然科学総合実験を必修の科目としています。

具体的な内容は、重力加速度やヤング率の測定実験などを通して自然界の物理現象の基礎的理解を深め、実験機器の基本操作・報告書の作成方法を習得することを目的とする物理学実験、隕石と地球を構成している岩石の組織・化学組成・密度の成因について、また、地球の層構成形成における密度と浮力の重要性とアインスターの原理についての理解を目指す地球科学実験、難溶性塩の沈殿・溶解反応の原理、元素の検出法についての理解を深め、自然界における化学現象を観察・考察する態度を身につけ、化学実験における基本操作・報告書の作成方法を習得を目的とする化学実験、観察・実験を通じて、生物の基本構成単位である細胞と遺伝子の実体であるDNAについての理解を深め、生物学における実験的手法の基本を習得することを目的とする生物学実験から構成されています。

言語文化基礎科目

科目実施班長 大橋 浩
(基幹教育院 人文社会科学部門 教授)

言語文化基礎科目は、外国語で目標の課題を達成することができる言語運用能力の習得を目指します。また、外国語の背景にある、ものとのとらえ方や文化に対する理解を深めることにより、母語や自国の文化を相対化する能力を養います。



初習外国語として開講されるドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、韓国語、スペイン語の授業では、文字や文法、発音など言語そのものの学習に加え、それぞれの言語の発想法や文化を知ることで、思考の幅広さを涵養することを目標としています。

私が担当する英語科目では、高校までに養った基礎の上に、より高度な運用能力を築くことを目指します。基幹教育の新カリキュラムである Q-LEAP (Kyushu University Learning English for Academic Purposes) は、学術英語の基礎が段階的に習得できるように設計されています。1年次では「学術英語1」として、リーディング・リスニング、ライティング・スピーキングに加え、リー

ディング・リスニング・文法・語彙を教室外で自律的に学習する CALL 科目を受講します。これらの必修科目で汎用的学術英語の基礎を身につけたうえで、2年次以降は学生各自の専攻や関心に応じて、汎用的学術英語の応用（「学術英語2」）、内容重視の特定目的学術英語（「学術英語3」）、スキル習得重視の特定目的学術英語（「学術英語ゼミ」）を選択科目として受講します。学術英語2では4技能に加え、オーラルコミュニケーション、テスト・ライティングが開講されています。学術英語3では科学英語や個別テーマの科目が各部署の先生方によって提供されます。学術英語ゼミでは、将来の学術研究につながる上級技能習得を目指したプロジェクト指向の授業が行われます。また、この科目には学術認定科目として、海外英語研修プログラムも含まれています。